

成人愛着スタイルとBigFive性格特性との関係性

The relationship between adult attachment style and big-five personality traits.

林 智 幸

問 題

愛着理論とは何か 人の行動・思考の一貫的な個人差を説明するために「性格」概念が使われる。性格の本質を解明するために多くの心理学者が、実にさまざまな立場から性格理論を多数提案している。それゆえ、同じ対象であっても複数の説明理論が存在しており、なるべく精緻化された共通の枠組みを使って整理されることが望まれてもいる。本稿では、共通の枠組みとして「ビッグ・ファイブ性格特性論 (Big-Five personality trait theory, 以下Big5理論)」を採用し、実証系アプローチと臨床系アプローチの性格研究の架け橋と期待されている「愛着理論 (attachment theory)」をBig5理論の観点から整理することを目的とする。

性格研究においては2つのアプローチがある。主に病理的な性格側面を臨床経験を基礎にして探求しようとする臨床的アプローチ（精神分析学など）と、主に健康的な性格側面を観察・調査・実験を基礎にして探求しようとする実証的アプローチ（基礎心理学など）があるが、性格研究は臨床的アプローチからはじまり、その後、実証的アプローチが導入されるようになった。現時点においては、同じ現象を前にしても全く異なる説明原理が使われているなど、両者には大きな溝がある。しかし、この2つのアプローチがともに重視しているテーマの1つが「愛着」であり、Fonagy (2001) は、「愛着理論は、一般的な心理学と臨床的精神力動論との間に横たわる溝を橋渡しし得るほとんど唯一の精神分析的理論である」と、このテーマを最重要視してある。つまり、愛着理論を柱として両者のアプローチの研究知見がより接近されると期待できる。

愛着理論はBowlby (1969) によりはじまった。彼は、人間には親密な情緒的絆を築こうとする普遍的要求があり、恐怖や不安にさらされたときに親密な対象からの保護を求めることで自らの生存確率を高めようとする人間の性質があると指摘した (池田, 2010)。この生存能力は、遺伝的に規定されたものであり、親、伴侶、子どもと愛着対象を変えながら生涯にわたって続く。

Bowlbyは、もともとKleinの指導を受け、ついでA. Freud門下に移るなど、精神分析学の枠組みの中で臨床的・研究的活動をしていたが、最終的には、精神分析学とは異なる独自の立場から理論を構築した。愛着理論は、その後Ainsworthといった実証系研究者たちにより、観察に基づく実証研究の方向へと流れ、精神分析学とは距離ができた。しかし、最近Fonagyによって、愛着理論が精神分析学の文脈に再導入されるようになったのである。

愛着理論としてBowlbyは、乳幼児が養育者への愛着を形成する過程には4つの段階があると主張した (遠藤, 2005)。第1段階は、人物の識別を伴わない定位と発信 (出生から生後約12週頃)、

第2段階は、1人または数人の特定対象に対する定位と発信（生後12週頃～生後6ヵ月頃）、第3段階は、発信および移動による特定対象への近接の維持（生後約6ヵ月頃から生後2～3年頃）、そして、第4段階は、目標修正的な協調性形成（生後3歳以降）である。すなわち、愛着を、他者によって受動的にもたらされるものから、子ども自らが能動的に築き上げるものへと、また、安全の感覚をもっぱら「物理的近接」によってのみ得られる状態から、それを「表象的近接」によっても部分的に得られる状態へと、漸次的に移行していくものと公式化した。

臨床的アプローチからの愛着理論 愛着理論は厳密には精神分析学の枠組みに含まれないが、精神分析学の強い影響を受けながら誕生した。ここでは、愛着理論と精神分析学の関係をFonagy (2001)に従って概観しよう。

精神分析学はFreudによって提唱され、その後、A. Freudらによる自我心理学派、Kleinらによる対象関係論学派、HorneyやSullivanらの対人関係論学派に分かれて発展した。現在、特に北米精神分析学界に限定すれば、かつては自我心理学派が優勢であり、現在では対象関係論学派が優勢であり、両者を融合した、自我心理学と対象関係論を融合したものとしてKernbergの自我心理学的対象関係論やKohutの自己心理学が誕生したという大雑把な流れを描き出すことができる。

Freudは生涯を通して自分の理論を改訂し続けていたため、Bowlby理論と類似性が高い時期もあれば低い時期もあり、「巧妙なフロイト学の専門家ならば、この精神分析の創始者が、愛着理論の友としても敵としても見え得るよう容易に描出することができる」(Fonagy, 2001)とされる。しかし総合的に判断すると、Freudは愛着理論が問題とする3～4歳以前の親子関係にそれほど注目しなかったなど、類似点よりも相違点が多いと言えよう。

Freud理論における無意識の重要性を継承したKleinがはじめた対象関係論学派は、Freud理論に比べるとBowlby理論との類似性が高い。Bowlbyが愛着理論に取り組んだ背景には「母性的剥奪 (maternal deprivation)」現象の説明原理を求めたことにある。母性的剥奪とは、乳幼児期に特定の養育者による十分な世話が行われないと、子どもの心身発達に深刻な歪みが生じ、後々まで悪影響が出るとする現象である。Bowlbyは母性的剥奪により乳幼児の主観的世界に歪みが出ると考えたのだが、主観的世界に注目するというアイデアは対象関係論からの影響を受けたものと考えられる。対象関係論は、乳幼児は誕生直後から無意識的の幻想を持っており、その幻想のフィルターを通して現実世界の情報を取り込んだ「内的表象」という加工物に基づいて生きていることを前提として、乳幼児の主観的世界を探究しようとする。しかし、この理論はあまりにも、主観的な幻想世界ばかりを重視し、現実の親と子の客観的な関係性にあまり注意を払わない。Bowlbyはこの点を問題として、対象関係論とは袂を分かち、新たな理論枠を模索しはじめた。

最重要な新たな理論枠の1つとして比較行動学が挙げられるのだが、ここではBowlbyがKleinの後に指導を受けた自我心理学派について触れておきたい。A. Freudからはじまる自我心理学派は、Freud理論における自我概念に注目し、自我がどのような機能を持つか、どのように発達するのかに最大の関心を向けるのだが、中には、乳幼児期の親子交流体験によりを重要視した人々もいた。A. Freudは養育者との特有の相互作用スタイルに対処するために子どもが招集した防衛機制が愛着パ

ターンであるとした。Mahlerは分離-個体化過程として乳幼児が母親を「情緒的燃料補給」のために求めながら、自律的な振る舞いを2歳までに円滑に移行すると主張した。Eriksonは将来の適応性のために母親との交流により獲得される「基本的信頼」が重要な役割を果たすことを主張した。乳幼児を対象にした自我心理学派の人々は観察による客観的事実も重視しながら、親子の情緒的絆を説明しようとしており、この点においてBowlby理論と自我心理学派は多くの類似点が指摘できよう。

実証的アプローチからの愛着理論 現在多くの実証的な愛着研究が行われているが、そのきっかけを作ったのはAinsworthであろう。しかし、それ以前のHarlow (1958) による子ザルを使った研究も注目に値する。Harlowは、生後間もないうちに母ザルから子ザルを引き離し、その子ザルを、ミルクを与えてくれる金網でできた代理母模型と、ミルクはくれなくても温かい毛布でできた代理母模型とがいる状況においた(遠藤, 2001)。観察の結果、ミルクを飲みに行くとき以外は、子ザルは金網製の代理母には近づかず、大半の時間を毛布製の代理母にしがみついて過ごし、ときにはそれを安全基地としてさまざまな探索行動を行っていた。このHarlowの実験はBowlby理論の妥当性を支持する重要な証拠として考えられた。

現在の愛着研究においては愛着の個人差を測定する方法に共通理解がなされているが、これに大きく貢献したのが、Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) である。Ainsworthは、もともと、親への安定した依存が新奇状況において探索活動や、知識・スキルの獲得を促進するかについて研究していた(遠藤, 2001)。その後Bowlbyの母子分離に関する調査研究に共同研究者として参加し、子どもの母子分離への反応に個人差が見られることを発見する。やがて、行動遺伝学に傾倒しつつあるBowlbyに納得できず、彼女は彼の元を去るが、その後Bowlbyの卓越性に改めて気づき、愛着の個人差を測定する「新奇場面法 (strange situation procedure)」を提案した(Ainsworth et al., 1978)。この測定法は、相対的にストレスフルな状況下で、乳児が愛着対象(しばしば母親)へどのような愛着行動を向け、その対象をどのように安全基地として利用するかに注目することで愛着の個人差を測定する。この方法によって、愛着形成スタイルは「安定型」、「両価型」、「回避型」に分類することが基本とされるようになった。

現在の愛着研究は、研究が始まった乳幼児だけではなく、いまや成人(青年)にまで対象を広げている。Bowlbyは、愛着理論を性格発達の統合理論と考え、発達早期に形成された愛着の個人差が性格発達の基盤としてその後の生涯発達に多大な影響を与えると仮定した(遠藤, 2001)。この仮定に立てば、乳幼児期の親子関係において形成された自己および養育者への期待や信念は、その後の成人(青年)の親密な関係、特に恋愛関係に影響を与えることになる。こうした発想のもとHazan & Shaver (1987) によって「成人の愛着理論」が誕生した。

乳幼児において養育者に対する愛着発達が4段階を経ることを先に述べたが、成人の恋愛形成も同様の4段階で説明できる(安藤・遠藤, 2005)。第1段階は、愛着の前：惹かれあい戯れあうこと、第2段階は、愛着の形成：恋に落ちる、第3段階は、明確な愛着：恋愛関係の成立、第4段階は、目標修正的協調性：恋愛の後(日常生活)である。すなわち、身体接触を伴う非常に接近した

一体感を感じ得る段階から、その関係を安全基地として、他の関係での生産的活動に取り組むようになる。

また、乳幼児における愛着の個人差が注目されたように、成人における愛着の個人差も同様の関心が向けられる。具体的には、乳幼児の愛着パターンと同様の「安定型」、「両価型」、「回避型」の3タイプに分類することが基本となる（金政, 2005）。「安定型」は、親密さや依存を強く思っており、また、対人関係における不安もないタイプである。「両価型」は、極端な親密性を対人関係に求め、相手から見捨てられることや愛の欠如への不安を感じているタイプである。「回避型」は、親密さを不快に感じており、他人に依存することを嫌うタイプである。

Big5理論とは何か 本研究では愛着理論をBig5理論の観点から整理することを目的とする。Big5理論とは、人の性格の特徴は主要な5特性によって説明可能であるとする性格特性論の一種である（山田, 1998; 村上・村上, 1999）。かつては性格に関するさまざまな理論や研究知見を包括的観点から整理するための「性格研究における共通言語」として期待されていたが、現在ではこのような期待は過剰であると批判されている（若林, 2009）。しかし、完璧な理論ではないにしろ、未だに有効な理論の1つであることは間違いない。

Big5理論は、性格形容詞などの性格記述語の分類を目的とする性格語彙研究と、特定の性格理論に基づく性格質問紙検査の開発を目的とする性格質問紙研究の2つの流れから誕生した（山田, 1998）。いずれもAllport & Odbert (1936)の研究が発端となり、それが1990年代になり合流してBig5理論が誕生していくことになる。語彙研究においては、Norman (1963)が「高潮性」、「協調性」、「誠実性」、「情緒安定性」、「教養」を、Peabody & Goldberg (1989)が「権力」、「愛情」、「仕事」、「情緒」、「知性」の5因子を抽出した。質問紙研究においては、Tupes & Christal (1961)が「高潮性」、「協調性」、「信頼性」、「情緒安定性」、「文化」を、Digman & Takemoto-Chork (1981)が「外向性」、「協調性」、「良心性」、「神経症傾向」、「経験への開放性」の5特性を抽出した。

2つのアプローチが1990年代に合流してBig5理論に基づく性格検査が開発されるようになった。例えば、Costa & McCrae (1992)のNEO-PI-R、辻 (1998)のFFPQ、村上・村上 (1999)の主要5因子性格検査が挙げられる。このように現在では代表的な性格特性論としてBig5理論は注目されており、5特性の具体的な名称については研究者によって若干異なるものの、その内容は本質的に同じと考えることができる。本研究では、活動を本質とする「外向性」、関係を本質とする「愛着性」、意志を本質とする「統制性」、感情を本質とする「情動性」、知性を本質とする「開放性」の名称を採用する。

本研究の目的 性格研究は、実証系アプローチだけでなく、臨床系アプローチだけでもなく、両方のアプローチの研究知見が統合されることが必要不可欠になる。本研究では両アプローチの「架け橋」とされる愛着理論を、性格研究を整理するうえで有効な枠組みであるBig5理論の観点からの整理を試みる。また、愛着理論は、自己イメージと対人関係を具体的に構築・維持するスキルとも大きく関連があると思われる。そこで、Big5理論と合わせて、自尊感情と社会的スキルとの関連性も検討する。

方 法

調査協力者と実施方法 静岡市内の女子大学生に対して、授業中に一斉に複数の調査質問紙を配付、実施、回収を行った。調査は88名に対して行ったが、研究データとしての提供承諾に同意が得られ、かつ、記入漏れのない有効回答者数は84名、平均年齢18.29歳（標準偏差0.59歳）であった。

主要5因子性格検査 村上・村上（1999）により開発されたBig5理論に基づく質問紙性格検査。全部で70項目から構成されており、受検者の受験態度を調べるとともに、12項目ずつの質問により、外向性得点、協調性得点、勤勉性得点、情緒安定性得点、知性得点が測定できる。なお、本研究においては、Big5を外向性、愛着性、統制性、情動性、開放性とする概念として検討を進める。それゆえ、情緒安定性得点は数値を逆転して情動性得点として結果を示す。

内的作業尺度モデル尺度 戸田（1988）により開発された、他者と事故の関係に関する心的表象である内的作業モデルを測定する尺度である。Hazan & Shaver（1987）の成人用愛着スタイル尺度を参考に作成されており、全部で18項目から構成されており、6項目ずつの質問により、安定性スタイル得点、両価性スタイル得点、回避性スタイル得点が測定できる。

自尊感情尺度 山本・松井・山成（1982）によって開発された、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方を測定する尺度である。「自尊感情＝成功／願望」と定義したJamesによって自尊感情／自尊心の実証的研究が始まったが、Rosenbergは、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度としての自尊感情を捉え、またその尺度化に成功した。山本ら（1982）の尺度はRosenbergの尺度を邦訳したものであり、単一の自尊感情得点が算出される。

Kiss-18 (Kikuchi's Social Skill Scale・18項目版) 菊池（2007）によって開発された、「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル（技能）」と定義される総合的な社会的スキルの高低を測定する。全部で18項目で構成され、単一の社会スキル得点が算出される。

結 果

それぞれの質問紙から、安定性スタイル得点、両価性スタイル得点、回避性スタイル得点（以上、内的作業モデル尺度）、外向性得点、愛着性得点、統制性得点、情動性得点、開放性得点（以上、主要5因子性格検査）、自尊感情得点（自尊感情尺度）、社会的スキル得点（Kiss-18）などの得点を算出した。算出された得点を対象にして、愛着スタイルに関する得点（安定性、両価性、回避性）が、他の得点とどのような関係があるかを相関分析により検討した。

分析結果を表1に示すが、主要な相関結果は次の通りである。安定性スタイル得点は、外向性得点 ($r=0.66, p<.05$)、愛着性得点 ($r=0.22, p<.05$)、開放性得点 ($r=0.29, p<.05$)、自尊感情得点 ($r=0.43, p<.05$)、社会的スキル得点 ($r=0.65, p<.05$) と有意な相関関係が見られた。両価性スタイル得点は、外向性得点 ($r=-0.25, p<.05$)、情動性得点 ($r=0.43, p<.05$)、開放性得点 ($r=-0.32, p<.05$)、自尊感

情得点 ($r=-0.67, p<.05$), 社会的スキル得点 ($r=-0.28, p<.05$) と有意な相関関係が見られた。回避性スタイル得点は、愛着性得点 ($r=-0.30, p<.05$), 開放性得点 ($r=0.40, p<.05$) と有意な相関関係が見られた。また、愛着性スタイル得点内部においては、安定性得点と両価性得点との間に有意な負の相関関係が見られた ($r=-0.30, p<.05$)。

表1 成人愛着スタイル、ビッグ・ファイブ特性、自尊感情、社会的スキルの相関結果

	ビッグ・ファイブ性格特性					他の特性		愛着スタイル		
	外向性	愛着性	統制性	情動性	開放性	自尊感情	スキル	安定性	両価性	回避性
安定性	0.66 *	0.22 *	0.07	-0.06	0.26 *	0.43 *	0.65 *	1.00 *	-0.30 *	0.02
両価性	-0.25 *	-0.04	-0.17	0.43 *	-0.32 *	-0.67 *	-0.25 *		1.00 *	0.08
回避性	-0.03	-0.30 *	0.15	-0.19	0.40 *	0.00	0.19			1.00 *

* $p<.05$

また、有意な相関関係だけではなく、相関係数の数値そのものを使って、相対的に成人愛着スタイルと他の心理的特性との関連性を検討してみた。すなわち、(1) 愛着性は、安定型、両価型、回避型の順番に関連が強い、(2) 外向性と自尊感情と社会的スキルは、安定型、回避型、両価型の順番に関連が強い、(3) 情動安定性（情動性が低いことを意味する性格特性）と開放性は、安定型と回避型がほぼ同じ程度で高い関連があり、両価型は低い関連性がある。これらの結果をまとめたものを図1に示す。

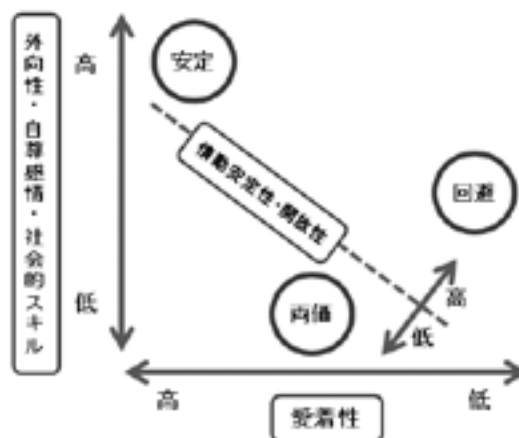


図1 成人愛着スタイルとビッグ・ファイブ特性などの相対的関連図

考 察

本研究は愛着理論をBig5理論の観点から整理することを目的とするが、最も関連が予想された愛着性以外にも、統制性を除く、外向性、情動性、開放性と相対的な関連性が認められた。また、自尊感情や社会的スキルとの関連性も認められており、結論として、本研究においては成人愛着スタイルと、統制性以外の合計6種類の心理的特性との関連性が認められた。また、図1にも示されているように、成人愛着スタイルは3種類の判別次元で分類できることも分かった。すなわち、安定

型＞回避型＞両価型を判別するための「愛着性」次元，安定型＞回避型＞両価型を判別するための「外向性・自尊感情・社会的スキル」次元，安定型＝回避型＞両価型を判別するための「情動安定性・開放性」次元である。

成人愛着スタイルをいくつかの次元で整理する試みはBartholomew（1990）が既に行っている（安藤・遠藤、2005）。質問紙を使って成人愛着スタイルを研究するなかで、彼は4カテゴリ・モデルを提案した。彼は、愛着は「自己に関する作業モデル」と「愛着対象に関する作業モデル」の両方の特質を反映するというBowlbyの主張に基づき、自己と他者に対する主観的信頼感の肯定を組み合わせ、成人の愛着スタイルを従来の3カテゴリから4カテゴリへと変更している。このモデルによると、自己と愛着対象に対して、肯定的（自分は他者から愛情や注意を受けるに値する／他者は助けてくれるし関心を持ってくれる）か、否定的（自分には価値がない／他者は信頼できないか拒否的である）の2つの態度を持つことになる。この組合せから、自己肯定的・他者肯定的が「安定型」、自己肯定的・他者否定的が「拒絶回避型」、自己否定的・他者肯定的が「とらわれ型」、自己否定的・他者否定的が「対人恐怖回避型」という4種類のカテゴリが導き出される。Hazan & Shaver（1987）の3類型に対応させれば、「安定型」はそのまま「安定型」、「とらわれ型」は「両価型」、「拒否回避型」と「対人不安回避型」が「回避型」に対応する形になる。

それでは「自己モデル」と「他者モデル」の愛着2次元は、Big5理論の観点からはどのように説明できるだろうか。安藤・遠藤（2005）によると、「自己モデル」次元は「他者への依存あるいは他者からの受容に対する信頼の程度」を、「他者モデル」次元は「親密な関係の回避の程度」を意味する。「他者モデル」次元によって、4カテゴリ・モデルにおいて、「安定型」と「とらわれ型」のグループと、「拒否回避型」と「対人不安回避型」の「回避」グループを判別する。この次元は本研究の結果からも合わせて解釈すると「愛着性」次元に相当するといえよう。また、「安定型」と「とらわれ型」を判別する「自己モデル」次元は、本研究における「情緒安定性・開放性」次元に相当すると考えられる。ただし、本研究においては愛着スタイルとして3カテゴリを採用しており、「自己モデル」次元は本来4カテゴリ・モデルの判別次元であるため、「自己モデル」次元が「情緒安定性・開放性」次元と全く同一であるという保証はない。今後の検討課題とされる。

続いて「情動安定性・開放性」の考察を行う。Big5理論における「情動性」と「開放性」は精神的健康と密接な関連がある次元とされる（杉浦・丹野、2008）。すなわち、「情動性が低く、開放性が高い」ほど精神的健康である可能性が高くなるが、この次元が本研究においては「安定型」・「回避型」グループと「両価型」を判別する次元として発見されている。これは「両価型」が他の2カテゴリに比べて精神的健康度が低いことを予想させる。実際、多くの精神病理と成人愛着スタイルとの関連性を調べた研究において「両価型」がその発症率が高いことが示されている。例えば、両価型の成人が、不安障害の特徴を持つ者の44人中29人であったり、摂食障害の特徴を持つ者の14人中9人であったり、純粋なうつ病患者の69%であったりする（北川、2005）。また境界性人格障害と両価型の関連性を指摘する報告もあり、ある研究では境界性人格障害12人全員が両価型であったり、あるいは36人中27人の75%が両価型であるとする研究もある。以上のように、両価型が精神的

健康との間には負の相関関係があると考えられ、本研究において両価型を他の2カテゴリと判別する「情動安定性・開放性」次元が確認されたことは妥当と考えられる。

「外向性・自尊感情・社会的スキル」次元は安定型>回避型>両価型の判別次元として本研究で発見された。安定型の人物は、自分を肯定的に考えており（自尊感情が高い）、他者との親密な人間関係を構築・維持する高い社会的スキルを持っており、それゆえに積極性（外向性）が高くなると考えられるので、この次元において高いのは妥当である。しかし、回避型と両価型については、愛着性においては両価型の方が相対的に高いにもかかわらず、外向性においては回避型が相対的に高くなっている。回避型は他者を否定的に考えており、自力で活動しなければならないという信念を持っているため（外向性が多少はある）、逆に、自分はある程度のことのできる人間であるというそれなりの自信を持っており（自尊感情がやや高い）、また他者との遠い距離を維持できる程度には社会的スキルを持っていると考察できる。一方、両価型は、他者との明確な距離感を持っていない中途半端な愛着性や低い社会的スキルを持っており、また自分に自信がなく（自尊感情が低い）、感情が不安定であるため、いろいろなことに対して消極的になってしまう（外向性が低い）と考察できる。

最後に、回避型と両価型の考察において「外向性」と「愛着性」の2次元にズレが生じていることについて考察する。性格特性論の分野においては、愛着性次元が独立して発見されていなかったのは外交性次元と強い関連性がある、あるいは、両次元は混在的であるのではないかという問題が指摘されていた。藤島（1998）によると、外向性は対人的能動性や支配性に関する因子であり、特に日本人の場合では、対人関係を配慮するという形で行動化され、愛着性因子との関連性が見られる。このような「外向性と愛着性の独立性の問題」にたいしても本研究では、両次元にズレが生じており、やはり外向性と愛着性は明確に区別すべき次元であるとの返答ができる。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E. & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment ; A psychological study of the Strange Situation*. Erlbaum, Hillsdale, NJ.
- Allport, G.W. & Odbert, H.S. 1936 Trait names: A psychological study. *Psychological Monographs*, 47 (1, Whole No.211.)
- 安藤智子・遠藤利彦 2005 第6章 青年期・成人期のアタッチメント 数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメント－生涯にわたる絆－ ミネルヴァ書房, Pp.127-173.
- Bartholomew, K. 1990 Avoidance of intimacy : An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss. Vol.1. Attachment*. New York : Basic Books.
- Costa, P. T. Jr., & McCrae, R. R. 1992 *Revised NEO Personality Inventory (NEO-PI-R) and NEO Five Factor Inventory (NEO-FFI) professional manual*. Odessa, Florida: Psychological Assessment Resources.
- Digman, J.M. 1989 Five robust trait dimensions: Development, stability and utility. *Journal of Personality*, 57, 195-214.
- 遠藤利彦 2001 第5章 関係性とパーソナリティ発達の理論－愛着理論の現在－ 中島義明 現代心理学[理論]事典 朝倉書店, Pp.488-521.
- 遠藤利彦 2005 第1章 アタッチメント理論の基本的枠組み 数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメント－生涯にわたる絆－ ミネルヴァ書房, Pp.1-31.

- Fonagy, P. 2001 *Attachment Theory and Psychoanalysis*. London : The Other Press. 遠藤利彦・北山修（監訳）
2008 愛着理論と精神分析 誠信書房.
- 藤島 寛 1998 III-4 5因子モデルの普遍性－5因子モデルの比較文化的検討－ 辻平次郎（編）5因子性格検査の理論と実践－ところをはかる5つのものさし－ 北大路書房, Pp.117-132.
- Harlow, H. F. 1958 The nature of love. *American Psychologist*, 13, 673-685.
- Hazan, C., & Shaver, P. R. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 池田暁史 2010 フォナギーとメンタライゼーション 妙木浩之（編）自我心理学の新展開－フロイト以後、米国の精神分析－ ギョウセイ, Pp.83-96.
- 金政祐司 2005 第4章 恋する・愛する 和田実（編）男と女の対人心理学 北大路書房, Pp.65-92.
- 菊池章夫（編）2007 社会的スキルを測る：KiSS-18ハンドブック 川島書店.
- 北川 恵 2005 第10章 アタッチメントと病理・障害 数井みゆき・遠藤利彦（編）アタッチメント－生涯にわたる絆－ミネルヴァ書房, Pp.245-262
- 村上宣寛・村上千恵子 1999 性格は五次元だった－性格心理学入門－ 培風館.
- Norman, W.T. 1963 Toward and adequate of personality attributes : Replicated factor structure in peer nomination personality ratings. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 574-583.
- Peabody, D., & Goldberg, L. R. 1989 Some determinants of factor structures from personality-trait descriptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 552-567.
- 杉浦義典・丹野義彦 2008 パーソナリティと臨床の心理学一次元モデルによる統合 培風館.
- 戸田弘二 1988 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業化説（working models）からの検討 日本心理学会第52回大会発表論文集, p27.
- 辻平次郎（編）1998 5因子性格検査の理論と実践－ところをはかる5つのものさし－ 北大路書房.
- Tupes, E.C. & Cristal, R.E. 1961 *Recurrent personality factors based on trait ratings* (USAF ASD Technical Report, No.61-97). Lackland Air Force Base, Tex.: U.S. Air Force. (reprinted in *Journal of Personality*, 1992, 60, 225-251.)
- 若林明雄 2009 パーソナリティとは何か－その概念と理論－ 培風館.
- 山田尚子 1998 I-1 特性論と5因子モデルへの収斂 辻平次郎（編）5因子性格検査の理論と実践－ところをはかる5つのものさし－ 北大路書房, Pp. 3-15
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

